

「事後学習」 報告

2019/03/01



スポーツボランティアプログラム「事後学習」

3月1日（金）、牧野標本館別館にて、スポーツボランティアプログラムの「事後学習」を実施しました。

2018年度におけるスポーツボランティアプログラムの活動は、3月3日（日）に開催される「東京マラソン2019」が最後となります。

この「事後学習」では、これまでの活動を振り返り、他のメンバーと共有することで自分自身の想いに向き合ったり、多角的な視点からボランティア活動の効果と意義を考えたりすることで活動を学びと成長につなげたりすることをねらいとしています。

本プログラムのアドバイザーである信太奈美先生（健康福祉学部理学療法学科 助教）や連携団体である「東京都障害者スポーツ協会」の市川大貴さんにもお越しいただき、学生の振り返りにご参加いただきました。

・「ココロ（キモチ）」の振り返り

「ココロ（キモチ）」の振り返りとして、感情面の振り返りを行いました。最初に、活動の中で“最も感情が動いた場面”を各自で考え、その後、グループで共有しました。

学生の話から、「選手のプレーを間近で見て、凄さを感じた」「様々な方々と関わることで多くの気付きがあり、自分の考え方が変わった」「自分たちと同じようにボランティアとして参加していた他大生ともコミュニケーションをとることができ、今回の活動だけでなく普段の生活につながるような良い関係が気付けた」「障がい者スポーツを通して選手や参加者と関わることで、障がい者を身近に感じるようになった」等、様々な場面で学生がポジティブな感情になっていたということが分かりました。

一方で、「知的障がいのある方と初めて接する機会があり、どのようにコミュニケーションをとれば良いかわからず、悩むことがあった」「障がいのある方とのコミュニケーションにおいて、自分の準備不足を感じた」等、思い通りにいかず、悩んだ際にネガティブな感情になったようでした。

ポジティブ・ネガティブといったそれぞれの感情から振り返ることで、一つひとつの活動に対する自分の気持ちと向き合うことができました。

・「アタマ」の振り返り

次に、「アタマ」の振り返りとして、今回取り組んだボランティア活動の効果・意義について各自で考え、その後、グループで共有しました。

さらに、そこで挙げられた効果・意義を①ボランティア自身、②課題の当事者・活動の対象、③活動する組織、④地域・社会、といった



対象別に分けて可視化しました。

【①：ボランティア自身にとって】

- ・活動自体が楽しい。
- ・障がい者スポーツが身近なものになる。
- ・スポーツの楽しさを感じる。
- ・自分を客観視できるようになる。
- ・自分の世界が広がる。
- ・多様な人と直接関わることで、学ぶことが多い。
- ・コミュニケーション能力が向上する。
- ・障がいのある方に対する自分の見方が変わった。

【②：活動の対象（競技者・選手・参加者等）にとって】

- ・立場、年齢等を超えた交流ができる。
- ・障がいのある方が輝ける場所をつくることができる。
- ・マイナースポーツの普及につながる。
- ・参加者を見守る目が増えることで異変に気付きやすくなる。

【③：活動する組織（連携団体や首都大）にとって】

- ・大会運営がスムーズになる。

・首都大や大学生（若者）のイメージアップになる。

・参加者としての視点をもつことができるため、当事者や主催団体の職員が気付かないことに気付き、情報を共有することができる。

【④：地域・社会にとって】

- ・スポーツを通して、地域が活性化する。
- ・ボランティア活動が広がっていく。
- ・普段の生活でも障がいのある人に積極的に関わることができる。



話し合った内容を整理し、まとめた後は、グループごとに参加者全体に向けてその内容を発表しました。他のグループからの質問に答えたり、学生とは異なる立場からの専門的なお話を信太先生や市川さんから聞きしたりすることで、自分たちの活動の意義・効果をより深く考えることができました。

来年度に向けた改善案も話し合われていましたが、新たな取組の構想も含めて様々なアイデアが出ており、来年度のボランティアプログラムの活動が今から楽しみになりました。

・プログラムの修了

今年度の活動は、これで終了となります。プログラムを修了した学生には、最後に修了証をお渡ししました。

今回初めてプログラムに参加した学生の中で、希望する学生は、2年目は「サポーター」として次年度も継続して活動することができます。ここで学んだことを一人ひとりが様々な場所で生かしていただければと思います。